



今年のクリスマス

いんちゃん 作・絵



年に一度の大仕事。それが、クリスマスだ。サンタもトナカイも、必死でプレゼントを配る。でも、クリスマスのために働いているのはサンタたちだけじゃない。

「今年はサンタのじいさんたち来るの遅いな」

十二月に入って何日か経つというのに、この店はとても静かだ。

「いつも^{がんば}頑張ってるから、今年はピッポたちお休みにしてくれたんじゃない？」

^{はと}鳩型ロボットのピッポが^{かし}首を傾げておれを見る。

「だといいいけど、クリスマスのこと忘れてるんじゃないか？」

あのじいさんのことだ。「おお、すっかり忘れとった」とか何とか言って、この町中の子どもたちのプレゼントリストを直前になって持って来るのが目に浮かぶ。

玄関のチャイムが鳴った。おれとピッポは嫌な予感を感じつつ、ドアを開けた。

「シャルルさんですね。お手紙です。すみません、ポストに入らなかったんで…」

「あっ、そうだったんですね」

「なんだ、郵便屋さんかー」

おれの肩でピッポがほっとしている。じいさんたちじゃなかった...と思いきや、差出人の名前を見て、おれの時間は一瞬止まった。

^{ほしふりまち}『星降町ひいらぎ十二の二十五 サンタ・クロース&ルドルフ』

作業室に戻り、封筒を開けると、何重にも折りたたまれた長い注文リストと一緒に、手紙と小さなプレゼントが出てきた。

「これ、ナンだろう？」

「あっ、こら。リボン^{ほど}解^{だめ}いちや駄目だぞ。まず手紙を読んでからな」

その手紙は、雪のように白い紙に丸みを帯びた字で書かれていた。

『桜町のシャルル様 ピツポちゃんへ

お久しぶりです。お元気ですか。

私たちトナカイとエルフ一同はクリスマスに向けて慌ただしく働いております。町長であるサンタ・クロースは「まだ寒くないからやる気が出ない」と言っているため、この度は失礼ながらお手紙で注文書をお送り^{いた}致しました。

短い期間ではありますが、桜町の子どもたちのためにもクリスマス・イブに間に合うよう、プレゼント作りをお願いします。私たちは例年通りクリスマス・イブの夜にそちらにお伺^{うかが}い^{いた}致します。

追伸：大量の注文にも関わらず、ご連絡が遅れてしまい申し訳ありません。お詫^わびと言ってはなんですが、プレゼントを同封しましたのでお受け取りください。お仕事に役立てて頂ければ幸いです。

赤鼻のトナカイ・ルドルフより』

「ねえねえ、開けていい？」

ピツポがプレゼントの包みをほどく。四角い箱を開けると、中には透き通った水色の石が入っていた。ごつごつした形が氷のようだ。

「わあ〜。きれいだネ。宝石かな？」

「仕事に役立てるって、材料にしていいってことか？ なんだか、もったいないな」

「でもさ、シャルルはよく桜石使ってるじゃん！」

ピッポが桜色の自分の鼻を得意げに見せる。この町に伝わる宝石、桜石で出来ているものだ。

「確かに、仕上げに桜石を使ってるな。あれには、『いい持ち主に会えますように』っていう願いを込めてるんだぜ」

「ああ、桜石に願いを込めると、一個だけ叶えてくれるっていうもんネ。もしかして、この石にもそういう言い伝えとかあるのかな？」

「うーん、どうだろうな？ ちょっと聞いてみるか。じいさんには言いたいこともあるしな！」

スマホを取り出し、電話を掛ける。相手はもちろん、サンタ・クロースだ。

「はい、もしもし。こちらサンタ・クロースです」

電話に出たのは、はきはきとした声だった。

「あれ。その声、赤鼻じゃないか？」

「ああっ、シャルルさんですね。ご無沙汰しております」

「おれ、じいさんの携帯に掛けたんだけど…」

「すみません。本人はまだ寝^ねているので、代わりに私が出ました」

「寝^ねてるって、もう昼過ぎだぞ」

「ええ。正確には、ベッドから出てこないと言いますか…。ここ最近、やる気がないようで私たちも困っているんです」

「それは…大変だな」

思わず頭を抱える。じいさん、赤鼻に仕事を任せきっているんじゃないだろうか。

「それで、ご用件は何ですか？」

「ああ、忘れるところだった。手紙、届いたぜ。プレゼントありがとな」

「いえいえ。シャルルさんたちには毎年お世話になってますから。その石、この町に伝わる
ほしふりいし
星降石という物なんです」

「やっぱり、何か言い伝えとかあるのか？」

「ええ。何でもエルフを生み出すらしいですよ。心を込めて作られた物に、クリスマスの間だけ命を与えるとされています。シャルルさんはピッポちゃんに心を与えることができたので、きつと力を受けられるはずです」

赤鼻の言う通り、おれは心を込めてピッポを作った。でもそれは、他の物も同じだ。ピッポにだけ心が宿ったのは、桜石に願ったからかもしれない。

「確かに、心を込めて作っているけどな…」

「その石はお好きに加工して使ってください。あと、これが肝心かんじんなところなのですが、夜の間は、自分のために作った物の側に置いておくこと。そうすればきつとその子に命が宿りますから」

「わかった。試してみるよ。詳しく教えてくれてありがとな。それと、じいさんが起きたら『注文書はもっと早く送れ！』って伝えといてくれ」

電話を切り、赤鼻から聞いたことをピッポに伝える。

「ってことは、ピッポのきょうだいが出るってことだね！」

「そうだな。けど、自分のために作った物って、ピッポ以外にいたかな？」

とりあえず石を作業台の隅に置き、おれはプレゼント作りに取りかかった。

サンタの仕事を手伝うようになるまで、おれはロボット屋としてロボットやメカを作っていた。今は、ぬいぐるみや本棚、木のおもちやなど、とにかく何でも作るから材料や道具も色々だ。

特にこの時期は、クリスマスの準備で部屋の中がどんどん散らかっていく。それを片付けるのがピッポの役割だ。

「シャルル〜、そろそろ充電切れそうだから、ピッポもう寝るね。シャルルもちゃんと寝なきやダメだよ」

「ああ、わかってるよ。おやすみ」

もう少し仕事を進めて、そうしたら寝よう。それまでは頑張るしかない。ピッポが眠った後も、おれは、しばらく作業を続けた。静かな作業室で、一人で仕事をしていると、どうしても眠くなってくる。

おれは机に向かったまま、眠ってしまった。

「シャルル、シャルルってば！」

ピッポの声で目を覚ますと、散らかっていたはずの部屋がきれいに片付いていた。

「おはよう、ピッポ。片付けてくれたのか？」

「違うヨ。ピッポも起きてびっくりしたんだヨ！ 見て、これ！」

昨日作ったおもちゃたちが、全部ラッピングされている。注文リストの完成したものにはメーカーで線が引いてあって、どこまで作ったか一目でわかるようになっていた。

作業台の星降石ほしふりいしを見ると、日の光を受けてきらきらと輝いていた。隣に置かれたペン立てが、やけにすっきりして見える。

「おとうさん！」

「うわっ！？ えっ、おれ？」

声のした方を向くと、机の横で三人の小さな子がおれを見上げていた。一人はおれにそっくり

な男の子。一人はたんぽぽのようなふわふわの前髪の子。そして、雨雲のような黒い前髪の男の子だ。

一番小さな、おれにそっくりな見た目の男の子がうなずく。

「おれたちを作ってくれたんだろ。だから、おれたちの父さんだ」

一番大きな男の子がおれをちらっと見ながら言う。

「こんなにたくさんのプレゼント、お父さんとピッポちゃんだけじゃ作り切れないでしょ。私たちもお手伝いするよ」

中くらいの背の女の子がにこっと笑う。

「ちよっ、ちよっと待ってくれ。お前たちは一体...？」

この子たち、自分が作ったのか...？ おれは必死に思い出そうとした。うーん...。ダメだ、わからない。

「そうか！ ペン立ての前に飾っておいたマスコットだな！ 何で作ったのかは思い出せないけど...」

「そうそう。思い出してくれた？」

女の子がうなずく。

「私たち、きょうだいで...って、知ってるよね。お父さんだもん。私、^{らん}蘭。お父さんにそっくりなのが弟の^{たく}拓で、こっちはお兄ちゃんの^{たすけ}太介」

「あっ、おれはシャルルで、肩に乗ってるのが相棒の...」

「ピッポさんだよね。知ってるよ」

お兄ちゃんの太介がピッポに言う。

「そ、そう」

おれとピッポは何だか落ち着かない気分で三人を見た。

「なあ、『お父さん』っていうのはやめてくれないか？ おれたち、親子とはちょっと違うしな」

「でも...おとうさんだもん」

弟の拓が、うるうるした目でおれを見上げている。

「わ、わかったよ。じゃあ、お父さんでいいから」

「ほんと...！」

たく
拓の表情がぱあっと明るくなる。おれは苦笑いをしてピッポと顔を見合わせた。

赤鼻に言われた通り、石の力を受けた三人は毎日おれの仕事を手伝ってくれた。星降町^{ほしふりまち}では、サンタの仕事を手伝う小人たちをエルフと言うそうだが、三人はまさに、おれを手伝うエルフだった。

作業台の横で、太介が熱心におれの仕事を観察している。おれは太介に作りかけのおもちゃを渡した。五つで一つの指人形だ。

「作ってみるか？」

「えっ、いいの!？」

たすけ
太介が目を輝かせる。そんなにやってみたかったんだな。太介は、おれを真似してプレゼント作りも手伝うようになった。

おれと太介^{たすけ}がおもちゃを作り、蘭^{らん}がおもちゃをラッピングする。ピッポと拓^{たく}は道具を片付けたり、プレゼントを配達順に並べるのが仕事だ。三人のおかげで、クリスマスの朝には全てのプレゼントが完成した。これで、準備は完璧^{かんぺき}だ。

クリスマス・イブの夜、みんなで最終チェックをしていると、玄関のチャイムが鳴った。

「お疲れ様です。プレゼントを受け取りに来ました」

店の前にそりを止めた赤鼻が、軽く頭を下げる。赤鼻の隣^{となり}であくびをしているのは、サンタ・クロースだ。

「やあ、シャルル。久しぶりじゃな。プレゼントは出来とるか？」

「準備オツケーっすよ。じいさん、眠そうっすね」

「ここ数日、仕事続きでな。お前さんは元気そうじゃな。毎年、わしらが来る頃には倒れそうになっとるのに」

じいさんは、おれの後ろに隠れていたきようだいたちを見て、納得したというように、うなずいた。

「おお、ついにエルフを持てるようになったか。お前さんも、成長したな」

「星降^{ほしふりいし}石の力、受けられたんですね。よかった、今年はプレゼントの量が多いし、準備期間は短いしで、エルフを持てなかったら大変だと心配していたんです」

赤鼻がにこっと微笑^{ほほえ}む。

「それでは、荷物を積み込みましょう。シャルルさん、プレゼントを配るときは、一緒に行きますか？」

いつも寝ないでプレゼントを作っていたから、プレゼント配りは赤鼻たちに任せていたが、今年は一緒に行けそうだ。

「ああ。こいつらも連れて行っていいか？」

「もちろんです。寒いので暖かい格好^{かつこう}をして来てくださいね」

それなら、しっかり準備してあるんだぜ。プレゼントを積み込み終わると、おれは一度、店の中に戻った。

「お待たせ。太^{たすけ}介、蘭^{らん}、拓^{たく}。頑張ってくれたみんなに、おれからのクリスマスプレゼントだ」

三人に渡したのは、丸く削った^{はしかりいし}星降石が付いた、おそろいの青いマフラーだ。

「ありがとう、お父さん」

「だからその呼び方は^{かんべん}勘弁してくれよ」

「そんなこと言って、ほんとは嬉しいくせに一」

ピッポに^{こづ}小突かれて、確かにそうだな、なんて思ってしまった。むずがゆい呼ばれ方だけど、こいつらと一緒にいられるのは幸せだ。

「シャルルさん。言いにくいんですが、エルフたちが命を持てるのはこの夜が明けるまでです」

そりに乗り込む直前、赤鼻がおれに小声で言った。

「ああ、わかってるよ。だから最後は思いっきり楽しまないとな」

「すごーい！ 私たち、本物のサンタさんのそりに乗ってるんだ！」

^{らん}蘭が目を輝かせて、夜の町を見下ろしている。そりの一番後ろでは、サンタのじいさんが大きな袋をひっくり返し、プレゼントを落としている。月の光に輝くプレゼントたちは、まるでそりの跡のようだ。

「空から落っことして、壊れたりしないのかな？」

太介が心配そうにつぶやく。

「大丈夫ですよ。ちゃんと子どもたちの枕元や靴下の中に入っていますから」

詳しくは企業秘密ですけどね。と、赤鼻が答える。

「さてと、これで桜町のプレゼントは配り終わったようじゃな。お前さんたちを家まで送ろう。そうしたら、わしらは次の町へ行くぞ」

赤鼻のそりで、おれたちは店の前に帰って来た。もう辺りは真っ暗だ。

「ありがとな、赤鼻。今年のクリスマスは、すごく楽しかったぜ。じいさんも、残りの仕事頑張れよ！」

「言われなくとも、わかっとなるわい。それじゃ、わしらはこれで…」

「ちょっと…まって」

たく
拓が遠慮がちに手を挙げ、おれをちらっと見る。

「ん？」

サンタのじいさんの元に駆け寄り、何か言うと、すたすたと走っておれの所に戻って来た。

「また来年会おう！ シャルルたち、元気でな～！」

「みなさん、ゆっくり休んでくださいね」

赤鼻とサンタは、星が輝く空に消えて行った。

「あー、楽しかったけど疲れたな」

「うん。今日はぐっすり寝れそうだな」

部屋に入ると、おれは太介たちに言った。

「みんな、ありがとな。みんなのおかげで楽しいクリスマスを過ごせたんだぜ。それじゃあ、またな」

明日起きたら、こいつらは元の姿に戻ってるんだよな。寂しい気持ちを抱えながら、おれは何日かぶりにベッドで眠った。

次の日、目を覚ますと、床に敷いた布団の上で拓たちが眠っていた。三人とも、マフラーを付けたままだ。

「お前たち、どうして…」

目を覚ました太^{たすけ}介が、少し恥^はずかしそうに言った。

「おれたちが元に戻ったら、父さんきっと寂^{さみ}しいだろうって、拓^{たく}が言ったんだ。だから、おれたち、サンタさんをお願いして…。もう少しこのままでいさせて、って。そしたら、マフラーを付けてる間だけ、この姿でいられるようにしてくれたんだ」

三人のマフラーには星降^{ほしふりいし}石が付いている。町長はその町の宝石の力を使いこなすことができるから、星降^{ほしふりまち}町の町長であるサンタのじいさんが、マフラーの石の力を高めたのだろう。

「そうだったのか。それじゃ、これからも、お前たちと一緒に暮らせるんだな。けど、マフラー付けっぱなしで寝るのは危ないんじゃないか？」

何かいい方法を考えないとな。それから、こいつらの部屋も作ろう。仕事が終わったすぐ後に、またやるが増えたけど、おれは何だか幸せだった。